

演藝と映画

演藝寫真新報

復刻版

横に長いのは東洋の「風景」で、縦に長いのは西洋の「自我」と喝破したのは、雑誌『演劇界』のイラストレーターでもあった橋本治だが、横長の、絵巻物のように開く写真誌は西洋には珍しいと思う。ところがわが国の演劇雑誌には、『演芸』（国際情報社）、『演芸写真』（演芸写真社）、『演芸写真帖』（大正通信社）などがあるが、公的機関に全揃いがなく、創刊から終刊までをおさえた研究が皆無であった。

歴史写真会発行の『歴史写真』の判型を借りた『演芸と映画』も同類であったが、これが復刻されるという驚きの成果である。戦時中刊行の『演芸写真新報』も、これまで顧みられることの少ない雑誌であった。巻頭に役者絵の復刻や着色グラビア、各座紹介ではプロマイドの再利用などもあるが、臨場感あふれる舞台面写真の意外な採録などもあり、ことに関西の劇場にも強いので、ありとあらゆる舞台面を見ておきたいという向きには必見である。



推薦文



兎玉竜一

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館 館長
文学学術院文学部 教授

推薦文



岡田秀則

独立行政法人国立美術館
国立映画アーカイブ 主任研究員

国立映画アーカイブは、前身の東京国立近代美術館フィルムセンターの時代から、所蔵する歴史的な映画文献の復刻に協力してきた。戦前期の映画界の動向をつ

ぶさに伝える「国際映画新聞」や「キネマ週報」といった業界誌のほか、そして映画公社が旧蔵していた戦時統制下の映画資料についても原本を提供し、復刻の監修を行っている。だが、この時期の文化をリードした活動写真／映画が多種多様な雑誌を生み出したことを考えるなら、現代への再登場を待つ文献はまだ多く残されていると言わねばなるまい。

1926年創刊の「演芸と映画」は、当時の最新の印刷技法を駆使した多色のグラフ誌「歴史写真」（1913年創刊）を発行していた歴史写真会が、時代の要望に応じて演芸と映画に特化したカラーグラビア雑誌として創刊したもので、当時の映画文化の急速な隆盛を伝えている（東京朝日新聞社が1924年に「アサヒグラフ」別冊として創刊した「映画と演芸」と混同なきよう）。今後も映画の興隆期が生み出した多くの文献が再び世に出ることを期待する。

